

英語教育における個別化(I)

その意味と英語教育の問題点

広島大学教育学部 三 浦 省 五

はじめに

この小論の目的は、外国語教育における個別化について、その意味と理論的根拠を明確にし、わが国の英語教育における教授・学習の個別化を志向するものである。

個別化の意味とその根拠

教授・学習は、その源泉をたどるならば、個別指導であったと考えられる。初期の教育では、師と弟子は1対1の教授・学習を展開していた。また寺小屋式の民衆学校においても、子どもが入学する年齢や時期および在学期間も異なっており、当然のことながら個別指導が重視された。否、個別指導にならざるを得なかったであろう。今日では、義務教育という制度のもとに、同じ年齢の学習者でグループを構成し、1人の教師対多数の生徒という形式をとっている。この同年令グループの多数の学習者に1人の教師が教えるという学級編成と教授形態は、1対1という不経済な教育を克服するものとして定着した。佐伯正一氏は、以上の趣旨のことを述べている。(9:5-7)

同じ年齢の学習者で学級を編成し、1人の教師が教授に当るとするならば、同じ教授内容を同じ方法で、しかも同時に指導するという、いわゆる一斉教授になりがちである。この方法では、教師の扱う教授レベル、教授方法によって、授業について行けない学習者や、また反対に、余裕のありすぎる学習者が存在することは言うまでもない。学習者には、たとえ同年令でも、身体的・精神的健康の程度、知的レベル、学習に対する適性や、学習習慣、興味、態度、学習の目的や目標、学習経験の程度など、学習者ひとりひとりの特質に由来する個人差が存在しているからである。

学習者間の個人差は現に存在しており否定できない事実である。個人差が存在するのは自然であり、教育の働きによってそれが無くなるものでもない。無くそうとすること自体、教育の価値を無にするものである。むしろ、個人差を認めた上で、学習者との共通の認識を基盤とし、個々の学習者を個性的な人間に育て上げることこそ教育の機能である。学習者と共通理解を深めるにしても、個性的な人間を育成するにしても、個人差を無視して、単線軌道を等速で進行させるような教授は許されてはならないことで、教授ということが、個々の学習者に完全に教育内容を理解させ技能を習得させることを前提としているならば、そのような教授は不可能という他はない。

1人の教師が、同じ教材を同じ方法で、学習者にひとりずつ個別に教えるという教授・学習形態を個別化と考えるならば、特に言語教育の場合は、他の人とコミュニケーションを行なうという学習目的と矛盾することになるし、また非能率的となる場合すらある。こうした個別化では、学習者はやはり単線軌道を走らされることとなる。一斉授業では、遅れた学習者を援助し、個人間の学力差を無くそうと努力するのであるが、こうした個別化教授では、“do-your-own-thing”的な態度で学習者に接するようになり、教師は、学習の速い者は能力が優れており、遅い者は劣っていると考えがちで、個々の学習者に最適の指導方法を工夫する努力や責任を回避する可能性が大となる。このような個別化は真のものとは言い難い。真の個別化は、学習形態——他の学習者と切り離しての個別指導——として

だけでなく、学習者ひとりひとりの個性を生かし、最大限に教育効果を上げるという「個性化」の追求が目的であり、それを実現させるための教育哲学である。

真の個別化は個性化であり、個性化を目標とする指導は学習者の個人的特性と個人差に注目することから出発する。個人差の内容は、学習に対するレディネスの個人差、学習のパタンの個人差、学力の個人差に分析される。従来は、学力の個人差のみで個人差の問題を論ずる傾向があった。学力差に基づく学級編成にしても、たとえば、英語学力を構成する種々の要素や技能の個人差を無視して、それらの総和を量的にとらえ、その差のみを基にして、「彼は英語ができる生徒である」とか「できない」とかいうように個人差を論じてきたように思われる。レディネスの個人差や学習のパタンの個人差によって指導の型は異なるはずである。これらの質的な要素に関する個人差の把握が個別化（個性化）の実現に寄与する。学習者の質的な個人差を考慮した個別化であるならば、それは学習指導に当然必要なものであり、それなくしては真の個別化は望めない。

個別化による教授・学習の理論的根拠の1つとして学習者の社会的な要求が考えられる。それは、ある定められた外国語を学習するのではなく、学習者の欲求に基づいて複数の外国語を履習させることを意味している。こうした場合には、ある学習者は外国語Aを、また他の者は外国語Bを学習するのであるから個別化せざるを得ない。しかし本稿では、わが国に見られるように、ほとんどすべての学習者が英語という1つの外国語を履習するような場合、しかも、学校という教授場面を設定してみたい。

学校教育という教授場面で、学習者がある1つの外国語（たとえば英語）を学習する際に、成功するか不成功に終わるかは、次の5つの主要要素が複雑に作用して決定されるという。（2：100）これらの要素とは、①学習者の外国語学習適性、②学習者の一般知能、③学習者の忍耐力、④教授の質、⑤学習の機会である。この5つの要素は、学習過程を正しく理解する際の拠所となるものであり、これらの要素を適確に記述・測定することが可能であるならば、学習におけるそれらの相互関係や依頼度を知り、それに基づいて個別化を推進することができよう。J・F・Bockman は、このモデルを引用して、学力差を量的にとらえず、学習の速さの差としてとらえ、目標達成と時間には因果関係があるという。（1：33-52）彼は、Carrollのあげた5つの要素のうち4つが「時間」と密接な関係があるとする。つまり、適性は、目標達成に要する時間の逆関数で示され、適性が低ければ到達時間が増加することになる。彼は、どんな学習者も、自分の行なっていることや学習の方法を理解しておれば、それがどんな複雑なものであろうと時間さえ与えれば完全に学習することができるとする。忍耐力は、学習活動に従事している時間であり、学習の機会は、ここでは、学校から割当てられた授業時数である。また、教授の質も、教材の提示、説明、順序立てなど、時間の使い方と解釈される。ただ一般知能だけは、学習すべき事項の性質や、学習の本質および手順を理解する能力と解され、時間とは無関係である。従って、彼は、学習者が自分は何をすべきか、どのような方法で学習していくかがわかっている時、学習期間を延長し、学習活動の強度を助長する条件のもとで、個人にあわせてそれぞれの時間を与えることが必要条件となると言うのである。

個別化の原則と英語教育の問題点

H・B・Altmanは、個別化の原則を10項目にわたってまとめているが、（1：8-9）わが国の英語教育に当てはめて考察する場合、次のような問題点が明確となる。「」内は、Altmanからの引用である。

- (1) 「個別化は、学習者中心主義であり、個々の学習者の欲求、能力、興味がカリキュラムの性質や型を決定する」 学習者の欲求、適性、能力、興味に適した教材、教授法が学習の動機づけに

重要な役割を演じ、それが結果的には学力に影響を及ぼすことは、今日まで何度となく説かれたことであるが、教師は、今までの長い伝統から、とかく一斉授業が「授業」だと信じがちであり、また、40～60名のクラスを担当しており、生徒に関する情報や知識に乏しく、とすれば、個々の学習者の特性を無視する傾向がある。従来、「差人差に應ずる英語教育」として研究はされてきたが、一般の教室においては、教師は、それを実践する余裕がない。

- (2) 「個別化は、①教授目標、②目標到達方法、③目標到達速度の3つの視点から考えられ、個別化されたプログラムは、これらのいずれかまたはすべてを含む」 従来の一斉授業では、これら3つの個別化の方法は組織的には全く行なわれていない。高学年になるに従って、目標に多様性がでてくるのも当然なことであるが、学習指導要領で各学年で学習すべき分量が定められていたり、文部省検定教科書の採用から自由に教材を選ぶことは困難になっている。1クラスあるいは1学校が同じ教材を用いている場合が多く、その教授目標も明確さ具体性に乏しい。目標到達方法については、すべての生徒に同一の教授法を採用している。目標到達の速度は、ライブラリー方式でない限り、個別学習を特徴とするL1も同じ速さの進度である。
- (3) 「生徒が独りで学習しようと、どんな大きさのグループで作業しようと、生徒の欲求に合わせて教授を考えること」 現在の英語教育では、生徒の欲求の入る余地はない。いつも受身的な学習を強いられているのが現状である。生徒の欲求を重視するがゆえに、教育的配慮を怠り、放任に陥っても危険である。学習者に、いつまでに、どのような方法で、何をすればよいか、さらに学習した事項を駆使してどんな活動ができれば真に学習したと言えるかを十分知らせる必要がある。
- (4) 「個別化では、認知力や精神的運動 (psycho-motor) の技術を発達させるだけではなく、言語活動の情的目標の到達に高い価値をおく」 言語に関する知識や技能の教授に重点を置くがゆえに、英語学習の成果の1つである情的分野の評価は全くと言ってよい程無視されている。英語教育によって得たものが、英語やその国民・文化に対するネガティブな感情、態度であるならば、英語教育はその学習者にとっては失敗であったと言わざるを得ない。中・高校生の30～40%は英語の重要性を認めつつも、学校の英語教育に対してはネガティブな態度を示している調査がある。
- (5) 「個別化は、学習者に学び方を学習させることによって容易になる。“how”は“what”をマスターすると同様重要なことで、個別化コースの最初の目標は、学習方法を学ばせることである」 英語の受験参考書、文法書、テープ、読み教材は、書店に多数見受けられるが、英語の学習法についてのもは少ない。教室においても、学習方法について無知な生徒に多くの宿題を課し、それに頼って授業を進めている場合がよくある。高校生の中には、発音記号の読み方、辞書の使い方すら知らない生徒もいる。
- (6) 「個別化は、完全学習の上になり立ち、学習活動では、高い到達基準が設定され、この基準に到達したものが次の新しい単元に進める」 この項に関しては全く行なわれていない。教師は自分が教室で教えたことを生徒は理解し、マスターしたと考えがちであるが、実は、教えたつもり、という場合がよくある。マスターしたと言える基準の設定から始めなければならないのであるが、今日の教育では、1年たてばマスターしていなくとも必ず進級して、より困難な教材を買わせられている。教師の側からすれば、定期試験の範囲を各学年共通にするために、教授の進度を速めたり、あるいは、進学校がゆえに、生徒や親を満点させるためにも、とにかく一通り教科書を学習させたことにおかねばならないという気持になりがちである。現在行なわれている多くの授業では、学習者すべてに完全にマスターさせるということは目標ではなく、それは学習者や親の責任となっている。